Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

068

共に育つ

～かかわりを通して互いの育ちを支えていく要因を探る～

溝口弘美

（福岡県筑紫郡那珂川町立南畑幼稚園）

○はじめに

私の保育の前提

①一人ひとりみんな違っていて当たり前

②子どもはお互いのかかわりの中で育つ

幼稚園は自分とは『違う』人間の存在を知る場であり、生活を共にしかかわりあう中で、『違い』を認めその『違い』を刺激としながら自分の世界を広げていく場と考える。しかしただ一緒にいるだけで育つものではない。

新しく入園（4歳児）した子どもたちの中に知的障害をもつR児（MRを伴った自閉症・MA1歳）もいた。この発表ではR児とまわりの子どもたちがお互いのかかわりを通じてどのように成長していったかということ、また、保育者はどのような援助を行ったかということを報告する。

○保育者の基本姿勢

R児に対して――　かけがえのないクラスの一員――

・特に配慮を要することはあるが、特別な存在ではない。自然体で温かいかかわりをしていく中で周囲とのパイプ役になっていく。

まわりの子どもたちに対して

・誰もがありのままの自分が出せその子がその子自身でいられる。

・一人ひとりが自由感をもって自分のやりたいことが思う存分楽しめる。

・一人ひとりがクラスの中で、かけがえのない存在として認められる。

このような日々が過ごせるよう努める。

○結果

4月

R児は場所こそ幼稚園にいるが、全く自分の世界にいる状態。常同行動（ぐるぐる回り、手をヒラヒラなど）や無目的的行動などが多く見られる。

クラスの他のメンバーは、クラスとしての認識は殆どなし。各々が一人あそび。クラスとしてのまとまりは殆ど見られない。ただ、近所の遊び友だち同士の交流は見られる。

《保育者の心ころがけたこと》

一人ひとりの子どものありのままを受容すること。

5月

R児の状態は殆ど変化なし。他のメンバーは、みんなで集まって絵本を見たりとか歌を歌うなど楽しむようになる。「自分は○○組！」等という発言に、クラスとしての認識が出てきたことが伺える。

R児に対しては、自分の行動に障害となる時のみ意識にのぼる。例えば、すべり台の上からいつまでもすべろうとしない時「先生、この人がどいてくれん！」

ただ、H児は「Rくん」と近づいていくなど、積極的関心を示す。これに対してR児は無反応。H児は最初戸惑うような様子であったが、反応しないR児を“試すかのように”つねってみたり、叩いてみたりする

《保育者の心がけたこと》

R児の気持ちの代弁、及び、それを通じて、相手にも気持ちがあることに気付かせていく。

6月

クラスの他のメンバーは、行動範囲も広がり興味が同じような気の合う友だちとあそぶようになる。かかわり合いの未熟さからか、ぶつかり合う姿もみられる

H児のつねったり叩いたりする行動はエスカレートし、軽く噛んだりすることもでてくる。R児は次第にH児を避けるようなしぐさが表れる。H児が近づくと顔をしかめたり、自分の指を噛んだり、頭を叩くといった自傷行為も表れる。

《保育者の心がけたこと》

自らかかわる主体性を大切にし、体験を通して相手を理解していけるよう見守る。

7月

クラスの他のメンバーは、保育者との信頼関係も安定し、保育者と手をつなぎたい、一緒にあそびたいという要求が高まる。

プールのふちをぐるぐる歩いているR児をH児が、

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

後ろから声をかけ覆いかぶさるように手を肩におく。

この時初めてR児はH児を両手で押し、反撃する。驚いたH児は叩きかえす。

《保育者の心がけたこと》

付き添いの母親とR児との距離間をもつようにし、クラスのメンバーが自由にかかわれる空間をつくっていく。

9月

クラスの他のメンバーは戸外遊びを好み、体を思いっきり動かしてあそぶ心地よさを味わう。

R児も総合遊具のすべり台に挑戦する。細い渡り棒の前で立ち止まっているとH児が「Rくんおいで」と手を握り前に引っぱる。R児はこめかみにシワをよせ腰を引くがH児は励ましを続ける。次第にR児はH児の手を強く握りしめながら恐る恐る動きだす。すべり台の前でふたたび立ち止まる。まわりの声かけによりH児が滑ってみせるが動きはなし。H児はR児を座らせ後方から押すように一緒に滑る。

《保育者の心がけたこと》

身体的な感覚の共有を通して共感の体験へと導く。

10月

友だち関係が広がり、今まで一人あそびをしていた子どもたちがごっこあそびに「仲間だ、仲間だ」といってあそびに加わるようになる。R児が登園する日（火木土曜日）を楽しみにするようになる。

R児は、子どもたちがあそんでいる輪の中に自分から入り、声をあげて笑うなどその場の雰囲気を楽しむ姿が見られるようになる。

《保育者の心がけたこと》

運動会の取り組みの中で

1、日頃のあそびに潤いを与えていく内容の工夫。

2、R児の母親への精神的援助。

3、まわりの保護者にR児への理解と、みんなでみんなの子どもを育てていく雰囲気づくり。

11月

クラスの他のメンバーは、自分たちで役割を分担し簡単な集団ゲームを進めていくようになる。

―― 保育記録より ――

S児　「先生、Rくんは4歳なのにどうしてしゃべれんと？」

保育者「Rくんはお口ではお話してないけど、心の中でたくさんお話しているんだよ。そしてお手々やお顔や体をいっぱい使ってお話しているんだよ。」

K児　「Rくんは病気やけん、手をこんなに（ジェスチャーで手をヒラヒラ）するっちゃろー？」

S児　「Rくん目が見えよーと？」

保育者「見えてるよ。SくんやKくんのお顔も。お友だちが笑ったり怒ったりしたお顔もみんな見えているんだよ。心の耳を澄ませていると、きっとRくんの言っていることがわかるようになるよ。」

後日、S児K児を含めた5～6人の男児がR児を囲み手の動きをまねている。理由を尋ねると「Rくんと話をしている」という。

T児は家に帰って「ぼくたちRくんが言いたいことは全部わかるとよ。お母さんたちは一緒におらんけんわからんめーけどね」という。

《保育者の心がけたこと》

子どもたちの疑問を受容し、R児を理解する手がかりを与える。心地よい関係でいられる配慮をしていく

2月

昼食後、R児は保育室のベットで眠ってしまう。まわりの子どもたちがそのことに気付き、「Rくん寝とうね」と保育者に話しかける。M児は大きな声で話をしている友だちのところにかけより、口元に人差し指をつけ「シィー!!Rくんが寝とうけん静かにして!!」と言う。音のでる遊具であそんでいた子どもたちが部屋に入ってくると、シィーと合図を送り、「Rくんが・・」と指をさす。「あっ！そっかー」とそっと部屋を出る。またたく間に部屋の中が静かになる。中には寝顔をのぞきこんだり、うれしそうにベットの下にもぐりこんだりする。以前、R児の唾液がついた手が汚いと言っていたM児は、湯沸室まで行き「静かにして」と言い、通りがかった保育者に「Rくん可愛いね」と耳元でささやくと走って寝顔を見に行く。

《保育者の心がけたこと》

保育者も仲間の一員として思いやりの行動を見守る

○まとめ

①子どもの発達には、友だちが重要な役割をはたす。

②子ども同士のかかわりを通じて、このように子どもは成長・発達する。これが幼稚園教育の本来の役割であろう。

③保育者の役割が重要である。

NII-Electronic Library Service